

研修生と日本語で円滑なコミュニケーションを図るためのポイント

1. 研修生の身になる

実地研修開始時の研修生は新しい環境へ移ったばかりで不安を持っており、人にもよりますが、自分から日本語で話しかけることはまだ難易度が高いです。そのような事情を理解し、研修生の緊張や不安を和らげるため笑顔や挨拶を欠かさないようにして、日本人の側から話しかけてください。その際彼らが日本語を1か月学習しただけ（J6Wコース参加の場合）だということを忘れず、やさしい日本語で話してください。話のきっかけとして研修生の国や地域、言葉、生活や文化などに興味を持つことも大切です。相手の言葉で挨拶ができるようになれば、研修生の親密感がさらに増します。

2. やさしい日本語で話す

1) ゆっくり、はっきり話す

ほとんどの研修生は短い期間日本語を学習しただけです。日本人が普通のスピードで話すと、知っている言葉や表現でも聞き取れません。慣れるまでは理解できているかどうか確かめながら、ゆっくり、はっきり話してください。

2) 「です・ます」体の簡単で丁寧な日本語を使う

私たちは日々の生活のさまざまな場面で相手に応じて言葉を使い分けています。しかし研修生に対しては慣れるまではそのような使い分けをせず、「です・ます」体を使って話してください。研修生はまず「わかりますか」「行きません」「元気です」というような「です・ます」体を学習し、その後「わかる?」「行かない」「元気だよ」という普通の文体（普通体）を学びますが、一般研修終了時には普通体を使いこなせるまでにはなっていないからです。

3) やさしい言葉や表現を使う

『みんなの日本語 初級I』で学習する語彙は約800単語しかありません。「食べます」「話します」といった基本的な語彙に限られていて、「食べます」に対しての「くう」、「話します」に対しての「しゃべる」などは学んでいません。同様に「します」の尊敬語「なさいます」や謙譲語「いたします」も習っていませんし、「始めます」「終わります」は習っていても「開始します」「終了」といった漢語も習っていません。ですから漢語やあらたまった表現、逆にくだけた表現は避けて、一般的なやさしい言葉（可能なら『みんなの日本語 初級I』で学んだ言葉）を使って話し、分からなければゆっくり繰り返し返してください。知っていても聞き取れなかつただけかもしれません。それでも分からないようであれば、類似の言葉に言い換えてみてください。ただし、中国の研修生の場合は、かえって「開始」「終了」といった漢語のほうが分かりやすいこともあります。また「ナイター」や「ガソリンスタンド」といった和製英語や、「チケット」、「バルブ」といった日本式の発音が定着してしまった外来語は、こちらは通じているつもりでも、実際には通じていないといったところもありますから、注意が必要です。

4) 短い文で話す

『みんなの日本語 初級I』には約75の文型があります。文型とは文の構造を示す枠組みです。「～を～」のような助詞の使い方を示すもの、「行く」「行かない」「高かった」等の活用形、「(行き)たいです」「(行って)ください」「(行か)なければなりません」等の文末表現などです。「～が、～」(逆接)「～から、～」(理由)などの重文、「～とき、～」「～たら、～」といった複文も含まれます。しかし習ったことを実際に使いこなせるようになるまでには、ある程度の熟成期間が必要です。『みんなの日本語 初級I(全25課)』を終了し、日本語の初歩を学習したはずの研修生でも、複文はほとんどの人が使いこなせません。ですから研修生に何かを説明する場合、重文や複文のような長い文はなるべく避けて、「うちは横浜です。駅から近いです。」「ここは危ないです。ですから入らないでください。」というように短く簡単な文を繋いで話すようにしてください。

5) 方言を使わない

研修生はどこでも誰にでも通じる標準語を学んでいます。方言や業界用語、世代に特有の言葉や言い回しはわかりません。もちろん必要なら、それらにも慣れてもらわなければなりませんが、最初はなるべく標準語で話すようにしてください。

6) 意味のない言葉を使わない

普通日本人は「あのですね」「えーとね」「まあ、何ちゅうか」「あー、何だかんだ言ってもね」といった意味のない言葉を無視して聞いています。しかし研修生にはそれに意味があるかないかもよくわかりません。私たちがこういった意味のない言葉を多く用いて話すと、研修生はそれらに気を取られて全体の意味を捉えそこなうことがあります。

3. 理解を助ける動作や身振り、絵や筆談といった補助手段も駆使する

言葉だけでは分からない場合でも、身振りや手まねを入れたり、絵を描いたりすると、分かりやすくなり、理解が進むことがあります。また知っているのに聞き取れないだけの場合も多く、その言葉や表現をローマ字や仮名で書くだけでも分かることもあります。また中国の研修生には漢字を使った筆談が、英語が分かる研修生には英語が、有力な手がかりになることはご存じのとおりです。ただし身振りや漢字は、国や地域によって意味が違うことがありますから、注意が必要です。(例えば、インドやパキスタンの一部では、「分かった」という場合、首を縦にではなく横に振る人たちがいますし、「手紙」は中国では「トイレットペーパー」を意味します。)できれば相手の言語に応じた辞書類を用意し、あらゆる補助手段を駆使して、研修生とのコミュニケーションを円滑に進めていくようにしてください。

4. 一方的に話さず、理解したかどうか確認しながら話す

理解してもらうためにやさしい日本語で話すのはもちろんですが、指導などで説明する場合は特に理解したかどうかを確認しながら、話を進めてください。その場合「わかりますか」と聞くだけでは確認になりません。適度に説明を中断して、説明してきたことを実際にやらせたり、内容をもう一度言わせたり、質問に答えさせたりして理解を確認してください。また、日本人が一方的に話すのではなく、研修生からの話を引き出すようにして、やり取りを楽しんでください。

以上